

(6)

氏名(生年月日)	クロ 黒	カワ 川	カオリ 香
本 籍			
学 位 の 種 類	医学博士		
学位授与の番号	甲第175号		
学位授与の日付	平成元年 3 月17日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当 (医学研究科専攻, 博士課程修了者)		
学位論文題目	急性肝障害における腹部超音波像の検討 —特に病態および予後との関連について—		
論文審査委員	(主査) 教授 小幡 裕 (副査) 教授 羽生富士夫, 教授 重田 帝子		

論 文 内 容 の 要 旨

目的

急性肝障害時の超音波像の報告は数多く認められるが胆嚢壁の肥厚所見が主で他の特徴的な所見の報告は少ない。今回、急性肝障害例において超音波像により描出される種々相を分析しまた超音波ドブラ法を用いて肝内血流を経時的に測定し、病態及び予後について検討を行った。

対象及び方法

対象症例は、定型的急性肝炎(AH)13例、重症肝炎(AHs: 血液生化学所見は劇症肝炎の範疇であるが意識障害が肝性昏睡 I 度までの症例)3例、劇症肝炎(FH)9例である。超音波検査にて肝の大きさ、肝内エコーレベル、肝腎コントラスト、肝静脈、門脈、胆嚢、脾、膵、腎、腹水の各項目について検討した。

超音波ドブラ法による肝内血流測定は横河 RT3600を用いた。対象はAH 11例、AHs 2例、FH 3例、および正常例である。測定は空腹時臥位にて行い、同一症例では同一部位で測定し経時的変化を計測した。血流量は血管断面を円近似と考え、 $\pi \times (\text{半径})^2 \times \text{血流速度}$ を算出した。又入射角は70度以下、入射角の変動が10度以内の範囲で測定した。

結果及び考察

1) 急性肝障害時の腹部超音波所見について経時的

検討を行った結果、肝腫大および萎縮、肝静脈狭小化、門脈の拡張および周囲エコーの増強、脾腫、腹水などが重症例に認められた。これらは重症度を判定する上で重要な所見とみなされた。

2) 肝の大きさの経時的変化を追跡したところ、AHでは正常ないし腫大が認められたがAHs、FHでは萎縮を示した。萎縮は、トランスアミナーゼ下降と同時期かやや遅れて出現し下降後の10日間における大きさの推移すなわち萎縮の進行状況が予後判定の上で特に重要と考えられた。

3) 超音波ドブラ法により肝血流の経過を観察した成績によると、極期および肝萎縮の回復期に門脈血流量の増加、静脈血流量の低下、門脈/静脈血流量比の上昇を認め、軽快例では臨床経過の改善と共に正常化の傾向を示した。またこれらの所見は、門脈拡張、静脈狭小化、脾腫等の画像所見の変化に対応した。

結論

以上超音波所見は、AH、AHs、FHの病期、病態の把握および予後を予測する上に有用であり、特に腹部ドブラ法を併用することにより循環生理的アプローチが可能となり、より適確な病態の把握に役立つものと考えられた。

論文審査の要旨

急性肝障害には種々相があり，劇症化を招来して重篤な経過を辿る例が数％に認められる。

本論文は急性肝障害時の肝の超音波検査所見を詳細に分析し，さらに超音波ドプラ法にて肝血流状況を解析することにより，重篤化の予測が可能となることを明らかにしたものである。臨床実地上極めて意義深い価値ある論文と認める。

主論文公表誌

急性肝障害における腹部超音波像の検討—特に病態お

よび予後との関連について—

東京女子医科大学雑誌 第59巻 第2号

99～116頁（平成元年2月25日発行）

副論文公表誌

1) ファーター乳頭部より粘液の排出を認めた

Biliary cupt adenocarcinoma の1例

胆道 2 (2) 179～185 (1988)

2) 馬鈴薯肝2例の超音波像

超音波医学 13 (5) 369～374 (1986)

3) 肝—脾門脈系疾患，限局性疾患

臨床医 12 (11) 2067～2071 (1986)

4) 胆管胆石と肝内胆石の超音波検査

胆と脾 7 (10) 1227～1233 (1986)

5) 胆石症の超音波診断

クリニカ 12 (5) 392～397 (1985)